

茄トンネル栽培に関する研究

第1報 被覆物と保温、植付期と収量について

太田勝美・宮脇弘三

1. 茄のトンネル栽培において 被覆物と保温効果、定植用と落花、収量の関係を調査した。
2. ポリエチレンとビニール両者間の厚さの違いによる温度差はあるが、実用的保温効果において変わらない。
3. トンネル資材として0.1mmビニールを最良とするも0.03mmポリエチレンでも十分に使用し得る。同時に夜間菰併用する事によって更に保温効果を高め突発的寒気の襲来による寒害を防ぐ事が出来る。
4. 今年は3月下旬予期しない寒波の襲来を受け3月20日植区は凍害枯死した。トンネル栽培において安全と思われる定植期は3月末から4月初旬であった。
5. 早植区は晩植の4月5日、4月10日植区に比し開花期が早いが異常低温の遭遇によって落花多く果実の肥大悪く、畸型果の発生多く、凍害による生育不振のための初期収量減退、生育後期においては草勢回復によって早植区著しく収量を増加した。
6. トンネル栽培は従来の早熟栽培に較べ明らかに増収効果が認められた。
7. トンネル用品種として草勢立性、強健で密植がきき、果型、果色良好、畸型果の発生少く、初期多収性の品種が望ましい。